

褒めることは進歩の原動力

前者のような言い方をされた子供は、たいてい悲観し、萎縮し、意欲を失って、母親の激励にもかかわらず、再度の鉄棒への挑戦は失敗するか、回避するか。そのいずれかに終わってしまうでしょう。

それに反して、後者のような言い方をされた子供は、自分の努力の結果に満足することができ、同時に、次にはもっとがんばって、うまくやってみせるぞ、と大いに意欲を燃やすことでしょう。

ドーマン博士は、そのような趣旨のことを述べて、親は後者のような考え方で、子供に接しなければいけない、と忠告しています。

子供が、自分自身に不満を感じただけならば、それは進歩の原動力になるかも知れないので良いのですが、親がわが子に不満を感じるのには、子供の進歩の原動力になるわけがありません。それに、ドーマン博士が指摘しているように、親の意図とは逆に子供を萎縮させ、やる気を失わせてしまう恐れが大いにあるのです。

母親の悲観的な言葉は、

「僕は、失敗することが初めからわかっていたんだ。僕って、お母さんが言う通り、だめな人間なんだ。いくらがんばったって、うまくできないんだ」

子供にこう思わせることになるのです。子供の向上を望むが故に口

にした言葉ですが、結果は逆に作用するのです。

それに引き換え希望的、賞讃的な言葉は、「僕は失敗だと思ったんだが、お母さんがあんなに褒めてくれて、喜んでくれているんだから失敗ではなくて、成功なんだな。ああ良かった。だけど、今度はもっとうんとがんばって、きっとあれ以上うまくやって見せるぞ」

と、子供にそう思わせるに違いありません。

母親の賞讃的、希望的な言葉は、このように子供に満足感を与えますが、子供は決してそれに“満足し切る”ことはありません。子供というものは一旦、満足感を味わいますと、さらに高い所を望んで、いよいよ意欲を燃やすものなのです。

満足し切った人間には、確かに向上はありませんが、不満がいっぱいの人間にも、やはり向上がないものです。その証拠に、だめな人間と自他ともに認めるような人間に、良くなったためしはないでしょう。不満がいっぱいでは、それを良くしようという気持よりも、諦めの気持の方が先に立って、いわば自暴自棄の状態に陥り易いからです。

それに引き換えて、満足した人間は、心が安定しますので、ゆとりが生じ、欠点を冷静に反省し、向上の意欲も旺盛になります。だから、満足はしても満足し切ることはないものです。

ことに、子供というものは、本質的に“満足し切る”ことを嫌います。だから、まず満足させて心の平静を得させてやるのが良いのです。

大人は満足すると、満足し切って向上心を失うことが多いのですが、それが大人と子供の違うところです。

そういう訳で、親は、わが子に不満を感じることがいろいろあっても、できる限り良いように解釈できるものは解釈して、わが子の現状に満足していた方が良いでしょう。そうすれば、親の心も穏かになりますので、自然と子供の心も安定しますから、精神活動が活発になり、従って、進歩向上が生まれます。

それに引き換え、わが子の進歩向上を願うあまりに、わが子の欠点だけを捜し求めていますと、どうしても不満が生じ、不快になり、いらいらして心の安定が失われます。親がそうなりますと、子供もその影響を受けて精神の安定を失い、従って、精神活動が停滞するようになります。

さて、愛子ちゃんの場合にも、二通りの評価が出来ます。お父さんの評価は、残念ながら、暗い、悲観的な面をより多くとらえているように思われます。そのため、それがいくらかでも愛子ちゃんの進歩の足を、引っ張ったことがあったのではないか、そういうことも考えられるのです。

そうではなくて、愛子ちゃんは、事実、障害児としては明るい材料がいっぱいあるのですから、明るい面だけをとらえるようにして、お父

さんがもっと楽しそうに明るくふるまったら、愛子ちゃんは、今よりももっと目ざましい進歩を見せたかも知れません。

こんな言い方をするのは、大層酷だと思います。こんなことが言えるのは、私が愛子ちゃんのお父さんではないからかも知れません。私が愛子ちゃんのお父さんだったら、やはり暗い面ばかりを捜して、明るい面を見落としているかも知れません。確かに明るい面ばかりを見て満足するということは、大変にむずかしいことだと思います。

けれども、どんなにむずかしくても、そうするようにしないと、わが子のために良くありません。いや、そうすることがむずかしいからこそ、親としてそのように努力しなければならないと思うのです。

さて、今まで、愛子ちゃんのお父さんからの手紙を通して、愛子ちゃんの成長の道程を紹介しながら、その教育法を考えてきました。手紙はもっとあったのですが、現在手元にあるのは以上で、あとはどこかに納められたまま、今取り出すことができません。

最後に、一昨年、この本の刊行を企画した時に、愛子ちゃんのお父さんに、この手紙を公開したいが公開してよろしいかどうか同意を求めた際、御意見を頂きました。それを次に紹介して、愛子ちゃんの記録の結びにしたいと思います。